

ユネスコスクール実践事例

千歳市立緑小学校

校長 渡會 朋広

担当 笠井 賢吾(教頭)

1. 活動の趣旨

本校校区には、清流千歳川が流れ、住宅街でありながら豊かな自然も存在している。また、学校の近隣に大きな公園を持つなど、自然についてのESDを学ぶのに適した場所もある。これらを活用し、環境と自分たちの生活のかかわりについて理解を深めさせることができる。本校では、ユネスコスクールの活動を通して、自然にかかわる体験を通した“自然環境・生態系保全”の心の育成を図っていく。

2. 活動・全体計画

緑小学校 持続発展教育（ESD）及び環境教育の全体計画



※ ESDとは 持続可能な社会づくりの担い手をはぐくむ教育。地球規模で起こっている環境、気候、人権、平和、開発といった現代社会の様々な課題を自らの課題としてとらえ、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことをめざす学習や活動。

3. 活動事例

①水の安全学習：本来、3年生以上が行う活動であり、パラリンピックカヌー日本代表



元監督の鳥畑氏（校区に在住）をお招きして、毎年行っていた。「カヌー学習」という名称でカヌーにも乗るが、目的は「自然の怖さや水の力を知り、準備をして付き合うこと」を体験することである。

コロナ禍前には、ライフジャケットを着用した5～6年生の児童が千歳川で流され、それを保護者が川岸からロープで救助する練習や、3～4年生は、同様の活動をプール内で行っていた(右の写真)。しかし、コロナ禍でプールの使用ができなかったため、全校児童を対象に、体育館で救命胴衣のつけ方や、おぼれている人を助けるためのロープ投げの練習をした。一方、職員への研修も事前に行い、こちらは毎年千歳川で実施していたが、今年度は体育館で実施した。

②アイヌ文化学習：本校の総合的な学習の中心教材である。アイヌの遊びから始まり、サケに対するアイヌの人々の思いや知恵を学ぶ。他の生き物の命をいただくことの意味について考えられる児童を育てて行きたい。



左の写真は「マレク漁」というアイヌの漁法を体験している様子である。このあとサケを解体し、「チェブオハウ」という汁物の料理にして食べるまでの一連の流れが学習となる。しかし、コロナ禍のため、サケの解体まで

の体験とし、食べることは実施しなかった。

この学習を通して、アイヌ文化が物や命を大切にし、無駄にしない思想が随所に見える。そしてそれは、自然や地球を壊さず、人間もその一部となって生きながらえていくESDの一つの答えともいえる。児童には、そのすばらしさに気づいてもらいたい。

4. 成果と課題

学習を通して、未来を生きる子どもたち自身に、自然環境の中で生活していることや生物の多様性について関心や理解が深まっているととらえている。コロナ禍となり、どうしても写真や映像が中心になりがちであったが、今できる最大限のダイナミックな体験を計画し、地域にある環境を生かして活動できることは、とてもありがたいことだと思う。

一方、環境保全のため自分たちでできることを考え実行するなど、持続可能な社会を作ろうとする態度の育成については、リサイクルの活動などを行っているものの、本校の学習においては実施が少なく、今後の課題である。

また、国際理解等の実践など、幅を広げることも今後の課題ではあるが、自然や生命への敬意、そしてアイヌ文化の考えを基に思考できる児童が育てばESDにつながるのではないかと考えている。

学校名	千歳市立緑小学校
住所	〒061-0074 北海道千歳市緑町4丁目4-1
電話	0123-23-4107
e-mail (教頭)	es-midori.d@ed.city.chitose.hokkaido.jp